

保育者から見た幼児の健康 - N市内の幼稚園・保育所における調査から -

著者	岸本 みさ子, ?内 正子
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	1
ページ	95-99
発行年	2015-03-16
URL	http://id.nii.ac.jp/1677/00000015/



保育者から見た幼児の健康 — N市内の幼稚園・保育所における調査から —

岸 本 みさ子* 高 内 正 子**
KISHIMOTO Misako TAKAUCHI Masako

要 旨

本研究では、保育者が子どもの健康状態をどのように感じているか（主観）に重点を置き、保育者の視点に立ったアンケート調査の結果をもとに、幼稚園と保育所を比較し、保育者の意識や保護者の意識、また子どもの健康状態など、それぞれの保育現場でどのような傾向がみられるか比較検定を行った。その結果、幼稚園よりも保育所に通っている子どもの方が、日常生活の疲れや生活習慣の乱れが気になるといった項目が多く挙げられており、幼稚園の保育者の方が気になる項目として挙げていたものは、子どもが習い事をする事で、その活動量は十分に足りていると感じている保護者が多いのではないかとということが明確になった。幼稚園や保育所の現場で気になる項目に差はあるものの、今後認定こども園化が進むことにより、「幼稚園」と「保育所」という区切りではなく、様々な家庭環境の子どもたち一人ひとりに対応できるような保育を目指していく必要がある。そのため、保育の現場での子ども達の身体活動環境をどのように提供すべきであるのかを考えるとともに、家庭における子どもの身体づくりの啓蒙方法などを考える必要性が示唆された。

キーワード：幼児の健康 保育者の視点 幼稚園と保育所の比較

I . はじめに

本研究は、2001年にN市地域助成金付研究として「乳幼児の心と身体の健康に関する調査研究」とタイトルしてN市内の全幼稚園・保育所の保育者にアンケート調査を依頼し、保育者の視点に立って、実施した子どもの心と身体の健康状態に関する質問紙調査研究の継続研究である。本研究では、保育者の視点に立った調査を実施し、保育者が子どもの健康状態をどのように感じているか（主観）に重点を置いている。具体的には、以下の4つの項目に関しての保育者の問題意識について、質問を設けてみた。

- ① 乳幼児の心身の健康状態について保育者が抱く問題意識
- ② 保育の中での保育者の取り組みやケアの内容
- ③ 家庭との連携の中で保育者が抱く問題意識
- ④ 保育者自身の健康状態と健康管理

調査の主な内容は、子どもの健康状態、子どもの心身の健康に関する取り組み、家庭との連携、保育者自身の心身の健康状態についてである。各項目において、「生活リズム」「身体の健康」「食生活」「運動と遊び」「心の健康」について質問項目を挙げ、市役所の保育の専門家である担当者と表現方法などを再検討し、見直しを行った上で質問紙を作成した。

以上の調査の結果と10年前の結果とを比較したところ、大きな差は見られなかったものの、いくつかの点で興味深い結果が出たので挙げてみる。まず、「園から帰

宅後の外遊びが少なくなっている」という項目の割合が上昇しており、子ども対象の犯罪が増加しているという社会環境の変化により子どもを取り巻く生活環境も影響を受けて変化しているのではないかと読み取れるような結果が出た。他にも、食事のマナーを保育現場で意識して行っているという項目や、毎朝家で排便してこない子どもが気になるといった項目も上位に挙がっており、「子育てを支援する」という立場で子どもや保護者と共に関わるという保育者の視点が確立したのではないかと読み取れるような結果も確認できた。自由記述の回答にも、保護者と共に子どもを育てていこうという意識が表れた内容が見られる。今では「子育て支援」という言葉が当たり前になっているが、この10年間で保育者の意識の中にその意味がきちんと根付いてきているのではないかと考えられる。子どもの体力という点については、「歩く力がない」「すぐに疲れたという」といった体力がないという回答は10年前と変わらずに上位に挙がっていた。その中で、子どもの生活習慣を見直すような項目（睡眠・食事・運動）に関して取り上げると、子どもの生活リズムを改善したいと努力している保護者の割合が高くなっており、保護者の意識が高くなっていると読み取れる結果もあった。しかし、大人の生活リズムに子どもを巻き込み、夜更かし朝寝坊を改善させる気のない親が気になると回答した保育者も多く、現実を見てみると意識の向上はみられるものの実践は伴っていないという現実と理想の懸隔が見られた。また、子育てを支援するとい

* 大和大学教育学部教育学科 初等幼児教育専攻 ** 関西学院大学教育学部

うことの延長なのか、保護者が保育現場に子ども達のしつけや子どもの身体づくりまでも全面的に任せるような傾向も見られた。

そのような結果を踏まえ、今回は、2010年度の調査結果をもとに、幼稚園と保育所を比較し、保育者の意識や、保護者の意識、また子どもの健康状態など、それぞれの保育現場でどのような傾向がみられるかを比較した。

II. 目的

今回は、幼稚園教諭と保育士との意識の差や、幼稚園に通う子どもと保育所に通う子どもの生活習慣や健康状態、保護者の意識に差が見られるかを調査した。幼稚園と保育所では、アンケート集計から出した上位の項目に関して、ほぼ違いは見られていない。しかし、細かく見て検討していくと違いが見られるのではないかと考えた。よって、どのような点が共通していて、どのような点に違いがあるのかを明確にし、子ども達の健康状態や保護者の生活習慣などに関する意識を把握することを目的とした。

III. 研究の方法

1. 研究対象

N市内の公立幼稚園 21 園 (58 クラス)、私立幼稚園 40 園 (301 クラス) の担任幼稚園教諭と、公立保育所 23 園 (69 クラス)、民間保育所 27 園 (100 クラス) の担任保育士を対象にアンケート調査を実施した。今回は 3 歳児クラスから 5 歳児クラスの担任保育者を対象とするので、保育所 169 クラスのうち、今回の研究対象となる幼児クラスは 60 クラスである。

2. 研究方法

アンケート用紙を説明の上配布し、郵送による返却を求めた。無記名回答方式により実施した。

アンケートの質問内容は、①保育中に気になる子どもについて ②保育の中で心がけていること ③家庭との連携で保育者として気になること ④保育者自身の健康について、という 4 題に関して、それぞれ「生活リズム」、「身体の健康」、「食生活」、「運動と遊び」、「心の健康」に関する質問項目を市役所の担当者と検討し、表現に修正を加えて作成した。

統計処理は SPSS を使用し、幼稚園と保育所のアンケート結果をクロス集計し、 χ^2 検定により有意差をみた。

3. アンケートの調査期間

アンケート調査は、2011 年 1 月より 3 月までの期間に実施した。

IV. 回収率

回収率は、公立幼稚園 89.7%，私立幼稚園 64.8%，公立保育所 97.1%，民間保育所 34% という結果となった。なお、保育所の幼児クラスの回収率は、35.5% であった。

V. 調査結果

今回は、「保育中に気になる子ども」「家庭との連携で気になること」の項目から、幼稚園と保育所の間に優位に差があると認められた項目を挙げる。(p < 0.05, p < 0.01, p < 0.001 で有意差あり)

1. 保育中に気になる子どもの問題について

この項目に関して、18 項目に有意な差が見られた。18 項目全てにおいて、幼稚園よりも保育所において、保育者にとって「気になる項目」として挙がっていた。

表 1. 朝からあくびをしている

	いない	いる	合計
保育所	10	50	60
(%)	(17)	(83)	
幼稚園	78	167	245
(%)	(32)	(68)	
合計	88	217	305
	p < 0.05		

表 2. 朝から元気がない

	いない	いる	合計
保育所	13	47	60
(%)	(22)	(78)	
幼稚園	103	143	246
(%)	(42)	(58)	
合計	116	190	306
	p < 0.01		

表 3. 朝から遊びに集中できない

	いない	いる	合計
保育所	12	48	60
(%)	(20)	(80)	
幼稚園	105	140	245
(%)	(43)	(57)	
合計	117	188	305
	p < 0.05		

表 4. 朝から疲れたという

	いない	いる	合計
保育所	17	43	60
(%)	(28)	(72)	
幼稚園	107	139	246
(%)	(43)	(57)	
合計	124	182	306
	p < 0.05		

表 5. 夜更かし朝寝坊である

	いない	いる	合計
保育所	5	55	60
(%)	(8)	(92)	
幼稚園	63	181	244
(%)	(26)	(74)	
合計	68	236	304
	p < 0.01		

表 6. すぐに保育室の床に寝転ぶ

	いない	いる	合計
保育所	10	50	60
(%)	(17)	(83)	
幼稚園	112	133	245
(%)	(46)	(54)	
合計	122	183	305
	p < 0.001		

表 7. 虫歯が多い

	いない	いる	合計
保育所	9	50	59
(%)	(15)	(85)	
幼稚園	81	165	246
(%)	(33)	(67)	
合計	90	215	305

p < 0.01

表 8. 朝食を摂取してこない

	いない	いる	合計
保育所	31	29	60
(%)	(52)	(48)	
幼稚園	163	79	242
(%)	(67)	(33)	
合計	194	108	302

p < 0.05

表 9. 偏食である

	いない	いる	合計
保育所	16	44	60
(%)	(27)	(73)	
幼稚園	27	219	246
(%)	(11)	(89)	
合計	43	263	306

p < 0.01

表 10. 噛めない

	いない	いる	合計
保育所	22	38	60
(%)	(37)	(63)	
幼稚園	133	111	244
(%)	(55)	(45)	
合計	155	149	304

p < 0.05

表 11. よく転んで顔面にけがをする

	いない	いる	合計
保育所	20	40	60
(%)	(33)	(67)	
幼稚園	131	115	246
(%)	(53)	(47)	
合計	151	155	306

p < 0.01

表 12. 集団遊びに意欲がない

	いない	いる	合計
保育所	17	43	60
(%)	(28)	(72)	
幼稚園	118	128	246
(%)	(48)	(52)	
合計	135	171	306

p < 0.01

表 13. 車通園である

	いない	いる	合計
保育所	5	55	60
(%)	(8)	(92)	
幼稚園	71	174	245
(%)	(29)	(71)	
合計	76	229	305

p < 0.01

表 14. 友達を叩く

	いない	いる	合計
保育所	3	57	60
(%)	(5)	(95)	
幼稚園	76	169	245
(%)	(31)	(69)	
合計	79	226	305

p < 0.001

表 15. 友達に噛みつく

	いない	いる	合計
保育所	34	26	60
(%)	(57)	(43)	
幼稚園	199	46	245
(%)	(81)	(19)	
合計	233	72	305

p < 0.001

表 16. 爪噛みをしている

	いない	いる	合計
保育所	21	39	60
(%)	(35)	(65)	
幼稚園	148	98	246
(%)	(60)	(40)	
合計	169	137	306

p < 0.001

表 17. 指しゃぶりをしている

	いない	いる	合計
保育所	26	34	60
(%)	(43)	(57)	
幼稚園	179	67	246
(%)	(73)	(27)	
合計	205	101	306

p < 0.001

表 18. 誰にでも乱暴である

	いない	いる	合計
保育所	33	27	60
(%)	(55)	(45)	
幼稚園	185	61	246
(%)	(75)	(25)	
合計	218	88	306

p < 0.01

それらは以下のとおりである。

2. 家庭との連携で気になること

この項目に関しては、5 項目に有意な差が見られた。その中の 2 つの項目が幼稚園よりも保育所において「気になる項目」として挙げられ、3 つの項目が保育所より

も幼稚園で「気になる項目」として挙げられていた。

幼稚園よりも保育所の方が「気になる項目」として挙げられていたものは以下の 2 項目である。

- ・早寝早起きの大切さを理解しようとしなない親（表 19）
- ・毎日、車で送迎をする親（表 20）

表 19. 早寝早起きの大切さを理解しようとしなない親

	いない	いる	合計
保育所	19	40	59
(%)	(32)	(68)	
幼稚園	117	120	237
(%)	(49)	(51)	
合計	136	160	296

p < 0.05

表 20. 毎日、車で送迎をする親

	いない	いる	合計
保育所	8	52	60
(%)	(13)	(87)	
幼稚園	81	159	240
(%)	(34)	(66)	
合計	89	211	300

p < 0.01

保育所の保育者よりも幼稚園の保育者の方が「気になる項目」として挙げられていたものは以下の 3 項目であった。

- ・遊ぶ暇がないほど、子どもにおけいこ事をさせている親（表 21）
- ・体操教室や水泳教室に行かせて運動は足りていると

する親（表 22）

- ・降園後の遊びを親の都合に合わせて遊ばせる親（表 23）

表 21. 遊ぶ暇がないほど、子どもにおいこ事をさせている親

	いない	いる	合計
保育所 (%)	44 (73)	16 (27)	60
幼稚園 (%)	94 (39)	146 (61)	240
合計	138	162	300

p < 0.001

表 22. 体操教室や水泳教室に行かせて運動は足りているとする親

	いない	いる	合計
保育所 (%)	36 (64)	20 (36)	56
幼稚園 (%)	67 (29)	166 (71)	233
合計	103	186	289

p < 0.001

表 23. 降園後の遊びを親の都合に合わせて遊ばせる親

	いない	いる	合計
保育所 (%)	15 (28)	38 (72)	53
幼稚園 (%)	27 (12)	207 (88)	234
合計	42	245	287

p < 0.01

Ⅵ. 考察

保育者から見た子どもや保護者の様子を比較してみると、幼稚園の保育者と保育所の保育者ではかなりの項目で差が見られた。特に、子どもの生活習慣の乱れを感じさせる「夜更かし朝寝坊である」、「早寝早起きの大切さを理解しようとしなない親」という項目や、「朝食を摂取してこない」といった項目においては、幼稚園よりも保育所の方が気になる子どもが多いという結果となっている。

芝木ら¹⁾は、保護者の視点に立ち、幼児の疲労度と生活習慣の関係性を調査している。その研究結果からも、幼稚園よりも保育所に通園している子どもの方が、生活習慣が整っておらず、生活習慣の乱れによる疲労度も高いという結果となっている。この結果からも示唆されるように、やはり、子どもは親の生活習慣の影響を大きく受けているということがわかる。共働き家庭が増え、核家族化が進み、子どもを取り巻く環境も大きく変化してきた。それに伴い、子どもの睡眠時間の確保や、朝食時間の確保などが難しい家庭もある。こういった環境の変化による生活習慣の乱れからくる弊害は、子どもの健康状態に大きく影響を与えているということが今回の結果からわかる。そのような家庭にどのような保育者の支援・援助が必要なのだろうか。保護者の意識改革のために保育者が伝えていくことも必要であるが、保育の現場でどのような支援ができるのかも考えていかなければならないのではないだろうか。

また、情緒面でも気になる項目が多々挙がっていた。自由記述の中にも挙げられていたが、子ども達は「感情の表出が上手くできていない」という課題も挙げられていた。乳幼児期の育ちの中で、保護者との関わりは非常に重要である。長時間一緒にいることよりも、一緒にいる時間をどのように過ごすのか、つまり、一緒に過ごす時間数よりも質が重要であるということを再検討する必要性が求められる。

幼稚園の保育者が気になる項目として挙げていたものは、習い事に関するものであった。保育時間内外で習い事をしている子どもが多く、習い事で子どもの身体活動量は十分に足りていると感じている保護者が多いのではないかと感じている保育者が多いことがわかった。芝木らの調査によると、幼稚園に通園している子どもの保護

者が「降園後家庭で過ごす時間の問題点」として、「体を動かす遊びが少ない」という意見を挙げている。そのような保護者の意識から、保育時間外で習い事に通わせ子どもの身体活動時間の確保をして、身体活動量も確保しているつもりになっているのではないかということも読み取れる。しかし、乳幼児期に獲得すべき身体能力は、習い事などで行うような決められた動きではなく、生活習慣を通して様々な、より複雑な身体の動きを経験することが重要である。保育の現場で身体活動量を確保するとともに、家庭での身体活動量の確保についても保護者と共に考えていくことが必要だと考えられる。子どもの身体活動に関しては、平成 24 年には文部科学省から幼児期運動指針が提示された。このような指針を活用し、幼児期に必要な身体活動を保育活動の中に取り入れていかなければならない。ここで大切なことは、先述したように「決められた動き」を実施するのではなく、子どもの主体的活動として身体活動を取り入れる環境構成を考えることである。この点を踏まえて保育者と保護者が子どもの日常生活での身体活動を保障していかなければならない。

今回の調査で、保育者の視点では、幼稚園よりも保育所に通っている子どもの方が日常生活の疲れや生活習慣の乱れが気になるといった項目が多く挙げられていた。子どもの健康を考える時、「子どもの健康を保障する生活習慣の獲得」が必要である。規則正しい生活習慣を獲得することにより、子どもの日常生活の疲れを減少させ、保育の中で適度な身体活動を取り入れることで、身体の健全な発達を助長することが必要であると考えられる。今後認定こども園化が進むことにより、「幼稚園」と「保育所」という区切りではなく、様々な家庭環境の子どもたち一人ひとりに対応できるような保育を目指していく必要がある。

子どもの心身の健康な育ちを考えると、家庭での生活習慣の獲得方法を保護者と共に考えると同時に、保育現場において子どもが、自分自身を守るために必要な最低限度の運動能力を身につけさせることが重要ではないだろうか。そのためには、保育者の質の向上が求められる。現代の子どもたちが抱える課題を読み取り、保育活動の中に取り入れることで、子どもの健康な育ちを保障していかなければならない。

今後は、保育の現場での身体活動環境を子ども達にどのように提供すべきであるのかを考えるとともに、家庭における子どもの身体づくりの啓蒙方法などを研究していきたい。

引用文献

- 1) 芝木美沙子, 谷山奈都美, 藤井綾香, 他 「幼児の疲労症状について (第 1 報) - 基本的生活習慣・食生活との関連 - 」 北海道教育大学紀要, 教育学編, 60 (2): pp.83-96 から抽出し筆者が要約した 2010

参考文献

- 1) 高内正子, 長谷川勝一, 橋本祐子 「乳幼児の心と身体の健康に関する調査研究」 2001 年度 N 市地域研究助成金付 保育出版社 2002
- 2) ベネッセ次世代育成研究所 『第 4 回幼児の生活アンケート報告書 国内調査 乳幼児をもつ保護者を対象に』 2011
- 3) 幼児期運動指針策定委員会 『幼児期運動指針』 文部科学省 2012 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
- 4) 田辺昌吾 「心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について - 「健康」保育者効力感からの検討 - 」 四天王寺大学紀要第 51 号 2011
- 5) 社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所編 『日本子ども資料年鑑 2012』 KTC 中央出版 2012
- 6) 岸本みさ子, 高内正子 「乳幼児の心と身体の健康に関する調査～ N 市内の幼稚園における調査から～」 大阪青山短期大学研究紀要第 36 号 pp.37-51. 2013

